
日本e-Learning学会 2009年秋季学術講演会を聴講して

小林 潔

学長室・FD全学委員会から出張費の支弁をうけて標記の学会に出席した。講演会は2009年11月26日(木)・27日(金)に品川の産業技術大学院大学において開催され、報告者は27日のみ参加した。今回の学会のテーマはFDと外国語教育で、ICT(情報通信技術)活用が話題となった。

27日最初の講演は会場校学長・日本e-Learning学会会長の石島辰太郎氏による「FDとe-Assisted School」。産業技術大学院大学は社会人学生が多く、各々の志向や背景が違うので授業評価アンケート等をしてFDに結びつけにくい。このような状況では教育環境の改善をはかる方が効果的で、その時にICTが有効だという。これが石島氏の名付けるe-Assisted Schoolである。

続く個別発表では、学生の出欠データから成績を予測し指導に活かそうとするもの(名古屋工業大)、学生のメモ・草稿をポートフォリオとして記録し思考過程を踏まえた指導を目指すもの(神戸情報大学院大)、諸外国とのTV会議で国際理解推進教育を進めた事例(中央大)が報告された。

午後の部は外国語・日本語教育がテーマで、医療者英語教育に関する発表(神戸市看護大)があり、事例報告として、杏林大(外国語学部のICT利用)、成蹊大(中国語ICT教授システム)、東京外大(日本語教材ネット配信)、首都大(アジア諸国との遠隔日本語教育)の実例が紹介された。

その後、「外国語教育におけるe-Learningの効果的活用」なるパネル・ディスカッションが行われた。司会は長谷川恒雄氏(大東文化大)。パネラーは報告者でもあった芝野耕司(東京外大)、

西郡仁朗(首都大)、湯山トミ子(成蹊大)の各氏と保坂敏子氏(日大)である。日本語教育に携わる諸氏が多いこともあり、日本語をどう対外的に広めていくかに力点が置かれていたが、日本人学生向け異言語教育にも当てはまる発言は多かった。ICTの利用は学生の方が進んでいるので教師が提供するものはむしろつまらないと受け取られるおそれがあること(保坂氏)、一方でICTにより教育の水準化が実現する(芝野氏)という意見はともに正しいだろう。参考になる具体的な提言としては、音声教育・習得は母語で十分な解説をうけないとうまくいかないがここにICTが利用できる(西郡氏)、がある。また、中国語はICTを活用して習得をはかる時代になっており、その基礎の上に「教室空間で運用しつつ学ぶ」ことが実現して、自律した外国語発話者が育成されるのだ(湯山氏)、とのテーゼは、我々の科研費企画「非専攻課程のための新しいロシア語習得基準とその教育内容に関する総合的研究」(研究代表者：神奈川大学堤正典)のモデルともなるものである。この際、芝野氏の言う学習履歴「マイニング」も大きな可能性を与えてくれる。

ICT使用の遠隔授業の事例も参考になる。非母語話者教師がコミュニケーション志向のe-Learning教材を開発するのは難しいが、その言語の本国教育機関のカウンターパートとなり、教育機会を学生に与えるのは可能だし、得るところも大きい。なお本学でもcampusを導入しLMSの活用が始まっているが、この点に関して報告を聞く限りでは、Moodle等既存LMS利用が大勢のようである。